



事故災害の記憶をどう生かすか

うえ 植 まつ 松 けん 憲 し 司†

昨年12月からの記録的な大雪は各地に被害をもたらしている。総務省消防庁によると、この冬の雪による死者は1月31日夕方までに118人に上るそうだ。思い起こすのは80～81年の「56豪雪」(死者133人)。すでに20年以上前のことであるが比較的鮮明に記憶しているのは、自身の体験からである。長野県のスキー場に出かけ、到着の翌朝一夜にして降り積もった雪でマイカーが埋もれ、所在すら分からなくなった。自動車で走行中に大雪で動けなくなり、暖を取るためエンジンを止めなかったため、逆流した排ガスで中毒死した人もおり、日程が少しでもずれていれば危うかった。自然の脅威を、まざまざと見せられ、人の営みの卑小さにも思いを致したものである。災害の自己体験で最大のものは、昭和34年に死者5098人を出した伊勢湾台風。名古屋近郊の当時の住まいは屋根が吹き飛び半壊、隣家へ避難して難を逃れた。いまだに台風のニュースを見ると弓なりにゆがんだ雨戸の残骸が頭をよぎる。東京に住むと雪も台風もあまり怖いとは思わないが地震は怖い。とは言え、それなりの準備はしつつも十分かと問われればまったく自信がない。多少の体験ではまだ足りないということかもしれない。とにかく記憶があってもあまり役に立っていない。

記憶ということでは、暮れに「博士の愛した数式」(小川洋子著)なる本を購入。本屋さんが選ぶ第1回本屋大賞、第55回読売文学賞を受賞という振れ込みは承知ながら、文庫本の帯に寺尾聡、深津絵里主演による映画の写真。映画を見る前に読まねばとただちに購入、最近ではめずらしく完読。映画は1月21日封切られ、雪の中徹夜組も出るほどの人気だそうだが、私的には本の感動で十分な気分になれた。主人公の数学博士は交通事故の後遺症で記憶が80分しか持たないという設定。ストップウォッチで計ったように決まった時間しか記憶が持たない。そういうことが医学的にあり得ることなのかどうか定かではないが、博士のように事故に遭わなくても、あるいは健忘症や認知症でなくとも、心理学者エビングハウスの忘却曲線の理論では「人間の記憶は指数関数的に減少する」のだ

そうだ。たびたび起こる事故や災害を思うに、忘却が被害拡大の最大の原因と言わざるを得ないが、忘却もまた防ぎきれないのが人間の宿命である。事故災害の体験者や安全の専門家はその原因や経緯を記録に残すことはもとより、社会が共有できるように公表し活用していく必要がある。物語の博士は記憶を残すため、メモ用紙を上着に安全ピンで止めている。この博士ほど切実ではないがわれわれも手帳やパソコンにさまざまな記録を残し忘却と戦っている。一方、同じ過ちを繰り返すなど言うものの何度でもやってしまう。記憶だけではどうしようもないことがある。そこで事故災害の記憶を残しながら教える仕組みが必要となる。その一つの試みとして、当学会の災害情報委員会では、安全工学に関わる経験・知識を有する専門家と事故災害データベースをつないで、Lessons Learned(事故の教訓、対策や安全教育への事故情報の活用方法など)を提供するLLS(Lessons Learned Service)の構築に鋭意取り組み中である。より多くの方がこのような取組みに協力していただけることを期待する。

2004年10月23日に起きた新潟中越地震では1995年1月17日発生の阪神淡路大震災の経験が各方面で生かされた。特にボランティアの人達の活躍には頭が下がる。8年半の時間は記憶を留めるに長くはなかったということだけではない。その間にあらゆる面で震災対策の重要性を喧伝し記憶を維持し、あるいは増幅したことが大きい。多くの課題は残されているが着実に前進しているといつて良いだろう。衝撃的な被害があればあるほど記憶は呼び覚まされ、世間も意識する。一方で発生頻度において地震の比ではない火災爆発事故や労働災害についてはどうであろうか。決して小さくはない事故災害であっても日常的に記憶から消えていくことに焦燥感を持たざるを得ない。健忘症はおもに老化現象から現れるような物忘れで、加齢により脳の働きが低下したことで起こり、認知症は何らかの脳の障害で起こるそうだ。健忘症では忘れたことを自覚でき、認知症では忘れたこと自体を自覚できない。事故災害の記憶や教訓に関しても、忘れたことすら自覚できなくなる前に「安全工学」に寄稿するなどして社会の記憶として残していただきたい。

† (株)インターリスク総研リスクマネジメント企画部：
〒101-8011 東京都千代田区神田駿河台3-9